

《書評》

荒武賢一朗著『屎尿をめぐる近世社会—大坂地域の農村と都市—』

清文堂、2014年1月、316頁

村上 紀夫*

Circulation of human waste manure in the early modern Japan: the farm villages and city of the Osaka area, Osaka, Seibundo, 2014.

MURAKAMI Norio

本書は「私たちは日常において排泄行為をしている」という印象的な一文で始まる。

日常的な行為である排泄に対して、私たちはどれほど意識的であっただろうか。そして、排泄物の行方を考えてみたことがあっただろうか。そうした問いを冒頭から突きつけてくる。

著者は、排泄行為が衣食住とともに人間社会の必須条件であるにもかかわらず、「我々専門研究者の努力が及んでいない」が故に、歴史の概説書や教科書では「屎尿について主体的に論じたものはほとんどない」という（5頁）。こうした現状に対し、「キワモノ」扱いをされがちな「排泄物から社会形成を明らかにできる」というのが著者の主張である（4頁）。

本書は、荒武賢一朗氏の論文集である。これまで、荒武氏は挑戦的で刺激的な論文を次々と発表されてきていたが、論文集としてまとめられたのは初めてのことで、こうして単著にまとめられたことを心より喜ぶたい。

大阪市史編纂所や自治体史での経験をふまえ、大阪地域の古文書を博搜し、屎尿研究の「最大の難点は関係史料の少なさ」（284頁）と著者自身が語る問題を克服していく。こうして明らかにされた屎尿の世界から浮かび上がってきた「大坂地域の都市と農村」像の豊かさは実に圧倒的である。また、著者は安易に一般化することなく徹底的に大坂地域にこだわりぬくことで、結果的に流通史のみならず権力論や環境史やといった広い分野に波紋を投げかける重厚な議論を組み立てた。

*奈良大学文学部史学科准教授

著者は先行研究をふまえて問題点を整理し、新しい視点の構築を目指している。研究者として当たり前のことといえばそれまでだが、先行研究と正面から格闘したうえで新しい論点を出していくとは決して容易なことではない。このような姿勢は一貫しており、本書に収録されている論文のみにとどまらない。「日本列島市場論の提起と近世の特質」（平川新編『通説を見直す』清文堂出版、2015年）という論文では、既存の「幕藩制市場」という概念に果敢に挑戦し、生産的に乗り越えようとしている。著者の研究には、これまでも触発されることが多かったが、本書もまた予想に違わず非常に刺激に満ちたものであった。

「尿尿」から見えてくる農村と都市の姿が実に鮮やかに描かれる本書の目次は以下の通りである。

- 序 章 尿尿を歴史分析で読み解く
- 第一章 近世大坂における青物流通と村落連合
- 第二章 摂河在方下尿仲間の構造と特質
- 第三章 摂河小便仲間の組織編成と取引
- 第四章 下尿流通と価格の形成
- 第五章 幕末維新时期・明治前期における下尿取引の制度と実態
- 第六章 社会環境史としての尿尿問題
- 終 章 本書の成果からの展望

六章からなる本論と序章・終章からなっており、一見して非常にバランスのとれた構成であることがよくわかる。

まず序章では、排泄によって生じる尿尿が負荷ではなく、肥料として価値をもち「商品」となった社会について論じられる。一般に現代社会では「尿尿処理」という言葉が使われているが、中世末期から近代は「尿尿利用」というべきである——こうして私たちの先入観を覆すことから始まる。そして、本書では「尿尿の流通構造とその特質を明らかにする」（3頁）ことがうたわれる。研究史が振り返られていくが、特に近世の大坂について論じる本書にとっては小林茂の業績が最重要であるとしている（8頁）。しかし、小林の意図は農民闘争や経済の発展段階を尿尿から明らかにすることにあり、「尿尿の商品価値や流通」から近世大坂地域を論じようとする著者とは論旨が異なっているとされる。

続いて著者が尿尿と関連づけて着目するのは青物（蔬菜）の流通である。青物は尿尿の代価として提供され、農村では青物生産に尿尿を肥料とした。尿尿と青物は、都市と農村の生産と消費の相互関係のなかにあった。また、流通史の視点から肥料を論じること、都市と農村の関係を明らかにすること、こうした諸問題を射程に捉えられている。

ここで著者が批判するのは「幕藩制市場」である。「天下の台所」とされてきた大坂の位置の再検討、武士の町大坂における町人論、そして文献史学の意義——。こうした重要な諸課題に関わる本書は、排泄物を論じた「キワモノ」などでは決してなく、歴史学の重要な課題に取り組んだ書ということになる。以下、本論を順に見ていくことにしよう。

二

第一章「近世大坂における青物流通と村落連合」では、都市と周辺地域の関係を青物の流通構造を通して論じている。天満青物市場の独占体制と周辺農村の対立がこれまでの議論の中心であった。著者はまず、実態の解明が遅れている農村からの青物流通について具体的に明らかにしていく。そのなかでは、屎尿汲み取りの代償として受けとった青物を売り捌いていた存在などが明らかにされたが、特に近在の稗島村について大部分を近隣の村々から村内商人が仕入れて天満市場などに販売していたことを浮き彫りにし、史料にあらわれる「問屋同様の商売」の実態を明確にしたことは重要な成果である。

天保期の株仲間解散にともなう青物仲間解散により、青物市場を通さない直売買が合法化されるが、嘉永4年(1851)に株仲間が再興される。こうしたなか万延元年(1860)に田中善左衛門を中心に大坂近在の85ヶ村によって結成された万延組について、85ヶ村は大坂へ出荷する青物作農村の数に比べれば少なく、大坂市場で物価が高騰していく時期に流通機構の拡充をして利益をあげることを目的とした組織であるとする。さらに、万延組の組織後も既存の30ヶ村の連合組織が実際の運営を担っていたことを示す史料を提示し、85ヶ村の団結によるものというよりも、既存30ヶ村の承認を得て新規の村が加入した二階建ての組織で会ったことが明らかにされていく。また、万延元年(1860)に万延組と市場仲間で約定が交わされる時には、市場と農村の双方に「通路人」と称する存在がいて両者を繋いでいた事実が指摘される。

天満市場の特権商人と在方の対立という構図で描かれてきた大坂の青物商売について、著者は丹念な史料分析から青物商売の具体像を明らかにされ、様々な新事実が提示された。青物作農村と大坂屎尿利用地域の重複関係にあったという指摘は、次章以下でさらに深められていくことになる。

第二章からは、屎尿を主題とした論文である。「撰河在方下屎仲間の構造と特質」では、近世後期における商品としての屎尿の流通組織と構造が解明されていく。ここで主に検討されるのは明和6年(1769)成立の撰河在方314ヶ村下屎仲間である。詳細な分析のなかった組織の末端について、門真二番村から具体的に考察され、「村内汲取組」が個別町・町人と契約をしていたとする。そこでは、村惣代(庄屋)が村落内部においては村内汲取組の調整などをし、対外的には下屎仲間との連絡をしていたと指摘される。下屎仲間は汲み取りの権利者が決められた「町割」が設定されている。この権利は売買や譲渡されることもあるようだが、町人側の承諾は必要としていないという。このような権利関係の一方で、下屎の商品価値の高さから、糶取・盗取といった不正行為も後を絶たなかったことが指摘される。続いて、下屎仲間組織の運営についてである。著者は組織の経費などについて触れたあと、仲間組織から業務を委託されていた「通路人」について詳述する。通路人が郷宿・用聞などの類似職種を兼務していたことを指摘し、万延組の通路人であった浜屋卯蔵について具体的に述べられていく。天保年間に郷宿渡世をしていた浜屋が、多様な仕事を通じて村落上層部と馴染みになっていき、幕末には西成郡内鈴木町代官所と結び、

村方と代官所をつなぐ存在となっていた事実が明らかにされた。支配機構と大坂の町・周辺農村を媒介した浜屋が活躍できた背景には、能力の高さとともに万延組・摂河小便仲間の中核に存在していた田中善左衛門を得意先としていたことがあると指摘されている。

本章では、類似職種を兼ねていくつもの顔をつかひわけながら幅広く活動した「通路人」について詳細に明らかにし、こうした存在を「通路人・郷宿・用聞層」と名付けている。幕末期の大坂地域を理解する上で、このような広範に活躍していた存在は重要であろう。用聞・郷宿などについては広域支配の媒介・補完者として論じる村田路人・岩城卓二らの研究があるが、これらの先行研究とはやや異なる視点から論じられている。「通路人・郷宿・用聞」、そして齊藤利彦が注目した寺院用達（齊藤利彦『近世後期大坂の宮地芝居と三井寺』『ヒストリア』178号、2002年）などを「層」として捉えることで、どのような役割や特性が見えてくるか、研究の深化が期待される場所である。

下屎についての二章に続く第三章の「摂河小便仲間の組織編成と取引」は、小便仲間を対象としている。ここでも、重要な先行研究として小林茂の業績について触れられている。小林が明らかにした事実については評価しつつも、都市・政治権力と周辺農村を対立的に描いているため、仲間の村立構造など不明な点が多いことが批判される。まず、小便の肥料としての重要性が指摘され、下屎と小便が別々の組織によって流通されていたこと、利用圏が下屎と小便で異なること、取引形態が違っていることなど、議論の前提となる事実が提示される。そして、摂河小便仲間の具体像や取引のありようについて史料から詳述され、売村・買村と融通人の関係、価格決定のプロセス、組織構成が浮き彫りにされていく。天保4年（1833）初見の融通人の役割についても、買村の前貸的機能、売村への供給など小便の過不足を調整し、スムーズな流通を支えていたことが指摘される。下屎仲間について論じた二章で注目された通路人については、小便仲間では今宮屋庄助が入用銀管理や奉行所との連絡などを担っていたが、安政3年（1856）に通路所が廃止されたことを指摘する。小便肥料の過不足調整を行っていた町人の融通人が仲間存立に不可欠な存在であったこと、通路人も郷宿・用達層と同質の存在であることをふまえて、著者は農民主導の独占取引が行われていたとする通説を批判する。

続いて組合惣代の役割などが述べられ、個別農民から各村、村から組合、仲間全体へと積み上げ式の組織において、年番惣代の影響力が指摘される。この年番惣代が次第に発言力を増していくなかで、「独裁的な支配」（147頁）をするようになるが、「肥し不廻り」の状況が発生するようになると組合惣代と年番惣代の対立が表面化していったとされた。こうして、都市と農民を対立的にとらえた農民闘争史観は否定され、町人と農民の商品を介した共存関係が指摘された。

本章では、非常に詳細に小便仲間組織の実態について明らかにされており、小便肥料という商品を通して都市と村落地域がつながっていたことが浮き彫りにされた。しかし、冒頭に「流通史の視角」（126頁）とあるが、「商品」流通よりも「組織形態」（151頁）に重きが置かれていたようにも思われた。都市と農村を対抗関係で見ると「農民的商品流通」（126頁）の否定には成功しているが、こうした組織を論じることが何故「流通」を論じたことになるのか、著者の見

解がもう少し説明されていればと感じられた。

第四章「下屎流通と価格の形成」では、下屎の消費者である周辺農村が研究対象となる。「農村と一括りにされている内部構造」の議論を深めることを課題とし(155頁)、商品経済の進展、「村落と都市」の対立といった見方を克服が目指されている。相場制の存在しない下屎が具体的にどのように取引されているか、近世後期における価格形成の実態が明らかにされていく。まず、柱本村の史料から汲み取りの実態が解明される。前年11月に一年分の代銀が支払われる原則だが、実際には個別交渉の過程で経営事情にあわせて延滞や減額、複数年分の一括支払いなど柔軟な取引が行われていたこと、汲み取りにあたっては効率化のために組に分かれて、四人程度が共同で汲み取りに行っていたこと、その回数は請負ヶ所の数に比例していたであろうことが述べられる。ここで、著者は「請け人」について、場所の維持にかかる負担や屎舟所有、経済力などの条件から村内上層部であったという重要な指摘がされていく。

続いて取引の裏にあった下屎価格をめぐる駆け引きについて述べられる。寛政2年(1790)、在方仲間と競合する町方急掃除人と呼ばれた都市に常駐する人びとによる汲み取り差止めが奉行所から命じられた。都市政策からいえば利便性が高いはずの町方急掃除人よりも在方仲間への下屎供給を優先したことから、著者は町屋の屎尿処理よりも農業肥料としての安定供給を図る大坂町奉行所の方針を読み取り、「下屎取引の諸問題は屎尿処理ではなく、屎尿流通である」(171頁)と指摘する。この段階では、年番惣代を頂点とする在方仲間側が価格統制としており、町の家主たちからは規定価格で決まった相手としか取引できない状態に不満が表明されているという。天保期には、それまで見られなかった町割りを無視して請け主よりも高い価格で買い取る下屎の糶上、糶取が行われるようになってくる。この背景に下屎の肥料としての価値が高いことにくわえて、在方仲間の影響力が弱まり、統制が揺らいできたのではないかと著者は見る。天保9年(1838)の訴訟を経て、下屎処理の正常化がめざして町方・在方の歩み寄りと和解が行われ、糶売・糶買防止と価格均一化による合理的「下屎汲取システム」が構築される。その後、天保の改革に伴う株仲間停止により、在方仲間の活動が停止する。これは、従来の農業活動を優先し在方を擁護する大坂町奉行所の方針が転換されたことになるという。その結果は糶取により請入箇所を失った村方の増加であり、株仲間が再興されてからも混乱は続くことが指摘される。

こうした論述のなかで、著者が重視するのは上層農民が潤沢な資金にものを言わせて請入箇所を抱え、小前層の経営を圧迫していたと考えられることである。在方仲間を運営する惣代中の殆どが村落上層の庄屋であり、下屎を高値で転売し、価格高騰を誘発している張本人であり、基準価格を設定しても二次取引の価格が規制されない限り問題解決につながらない。こうした構造を指摘したうえで、従来の都市と農村の対立だけでなく、農村内部における請入箇所を「持つ者」と「持たざる者」の格差への注意を喚起する。「商品経済が進展した結果」こうした「隠された流通」がもたらされた(187頁)という。

本章では、価格決定のメカニズムや農村内部の格差、都市と農村の関係など、非常に重要な事実が明らかにされた。ただ、「はじめに」において「通説的に商品経済が進展している」とされ

る近世後期に「実際としてはどうだったか」（155頁）と問いが投げかけられているが、「商品経済が進展した結果」として「経済格差」が生まれる（187頁）と論じられている。こうした単純化は著者の意図するところではないであろうが、佐々木潤之介の世直し状況論に近い議論に見えなくもない。著者の真意がそのようなところにはないことは承知しているつもりだが、もう少し先行研究と著者の近世後期理解の違いが明確に示されていればと思われた。

詳細にわたる近世の分析を経て、第五章「幕末維新时期・明治前期における下屎取引の制度と実態」では近世・近代移行期を対象とする。まず、明治維新时期における制度的変遷から新政府の政治的意向を読み取ることが試みられていく。慶応4年（1868）8月の鑑札下付が政府による規制の起点として位置づけられているが、慶応4年（明治元年）における新政府の方針は在方仲間からの要請を受けて従来の方針と変わらない通達が出されたという。翌2年には状況が一変し、在方仲間による一括掌握からの「解放」がうたわれる。ここで著者が注目するのは、実際に行われたのは「完全なる自由取引」ではなく、社会資本整備にかかわって行政機関への上納がなされるようになったこととである。こうした変革によって明治3年（1870）に下屎騒動とよばれる事件があり、在方・町方によって定約書が交わされる。ここでの合意は明治2年（1869）の大坂仕方を復古にし、「下屎方」（在方仲間）が機能する旧幕府時代の制度が復活したものであった。この在方下屎仲間は明治7年（1874）に大阪府が解散命令を出し、大阪府屎尿取締所に権限が委譲されるまで続いていたとされる。こうした制度上の変遷を明らかにした著者は、藤田村の文書の分析を通して取引の実態を明らかにしていく。浮かび上がったのは、短期間で請入人と請入場所が変わる極めて流動的なありようと、約定書にあるような米穀による取引が実際には行われておらず、制度の変化と実態が一致していないという事実であった。

また、政策面については、大坂町奉行所による当事者間の合意に依拠した政策決定から大阪府主体の運営に移行していくことを指摘する。コレラの流行を経験した新政府は、臭気や衛生面での対策を義務づけていくことを指摘し、「旧幕府時代にはなかった都市衛生観念の誕生と清潔意識の向上は、屎尿問題を新たな方向に導いた」とする（250頁）。屎尿は塵芥とともに不浄として包括してコントロールされるようになる。こうした変化を著者は語彙に注目して、それまで「下屎」「小便」と呼ばれていたものが「屎尿」に一括され、旧幕府時代に使われなかった「不潔」「不浄」「掃除」「排泄物」など忌避感を表現する言葉が使われるようになるという。制度面にとどまらず、「不潔」といった語彙やニオイへの対応から人びとの意識に注目していったのは慧眼であろう。

語彙に着目した議論は興味深いものだが、たとえば「掃除」については「急掃除人」の語があるし、「不浄」についても例えば寛政11年（1799）の「摂河下屎直請村々願状写」に「不浄之下屎ニハ御座候へ共」（『吹田市史』第六巻、434頁）と見えている。「屎尿」も言葉だけなら『和漢三才図会』巻35「農具」に「糞（こゑ）」の説明として「大抵用人屎尿為良」とある。むしろ、従来「商品ではない」というタテマエを支える論理として使われていた「不浄」「掃除」という語彙が、近代になって「商品」としての価値を喪失していくとともに前面に出て来ることの方が

重要なのではないだろうか。

第六章「社会環境史としての尿尿問題」では、ここまで明らかにされてきたことを社会環境史としての視点で読み直した「著者なりの環境史」である。ここでは、尿尿が周辺農村に売却される事実上の商品であり、それを河川による舟運が支えてきたことを確認する。その上で「商品流通の実態や人々の意識に迫る」ことのない「安易なりサイクル論」に警鐘を鳴らす(265頁)。明和6年(1769)に摂津・河内314ヶ村が汲取の主導権を握り、大坂町奉行所が急掃除人の規模縮小を命じたことについて、急掃除人を廃止していない点から「複合的なシステムによって排泄物処理を徹底する意図があった」(267頁)といい、排泄物を都市に滞留させないような行政的対応が18世紀後半に存在していたことを指摘する。こうして商品と見なされなかった尿尿が、18世紀後半に商品価値を高めていったことで需要が増大し、流通が促進されたことで都市環境が維持されたとする。下尿の処理と田畑肥料の確保という「両者の目的が合致したこと」が結果的にリサイクルの成立につながったと指摘する。こうした需給のバランスが都市・農村で災害が起こると崩れたという点も重要な指摘だろう。そして、近代になると大阪府尿尿取締所が一括管理をしていくようになることに触れ、明治初年には伝染病の流行などを背景にして農村への還元よりも都市衛生に力が置かれた尿尿処理システムに変容していったことを指摘する。

終章「本書の成果からの展望」では、本論の研究成果をうけて、今後の課題が語られている。

三

一読して何よりも印象的だったのは、確かな史料の読解と精緻な分析に裏付けられた都市と近郊農村の関係のリアリティである。都市と農村といえば、都市資本、特権商人による農村搾取と農民闘争というイメージや、反対に都市と農村が対立関係を持たなかったとする都鄙連続体説のような既成観念の影響も強い。しかし、本書ではこうした先入観にとらわれることなく、都市と近郊農村の共存・協調関係、村落内部の「持つ者」「持たざる者」の存在といった複雑な姿を実に生き生きと描いている。また、民俗学では尿尿と野菜や米の交換や下肥運搬の苦労とともに、村から得意先の町方へ正月飾りを持参する農民といった温かい都鄙の交流が描かれることも多いが、ここでは幕末期の場所の流動性など想像以上にドライな関係も浮かび上がっている。

続いて、感じたのが著者も重要な先行研究として挙げている小林茂『日本尿尿問題源流考』との違いの大きさである。フィールドも研究対象も同じで、時に分析する史料さえ同じであるにも関わらず、都市と生産農民の対立構図を描き明治3年(1870)の下尿騒擾に収斂させていく小林と、「商品」としての下尿・小便の流通の視点で論じる著者との違いは対照的である。先行研究と真正面から向き合ったうえで、史料の読み込みと精緻な分析によって乗り越えられており、大坂の尿尿研究が新たな研究段階に入ったことを感じさせる。

ここで明らかにされた多くの事実は、尿尿に限定されることなく、広く活かされうる示唆に富む成果であると思われる。

こうした重要な書物に対して、いささかの外れかもしれないが、この新しい知見に満ちた著書に接していくつか頭に浮かんだ疑問を挙げさせていただくことで、つたない書評に代えさせていただきたい。

まず、「商品」としての屎尿の消費である。「処理」ではなく「流通」であるというのが著者の基本的なスタンス（17頁）だが、ここで主として論じられているのは都市から下屎仲間、小便仲間までの動きであり、屎尿を実際に肥料として使用する文字通りの「消費者」についてはほとんど論じられていないという印象をうけた。例えば、小前百姓に高額で下屎を転売するという指摘は重要ながら、触書（185頁）の記載によるもので、実態がどのようなものか充分明らかにされているとはいいがたい。肥料は作物により施肥の時期が決まっており、需要は季節によって変動するから特定の時期に需要が集中する。また、屎尿は発酵をへてから使用されるといわれるが、屎尿はどこに蓄積されていたのだろうか。著者が「文書化されることが極めて少ない」（17頁）としていることから明らかなように、史料的な難しさは理解しているが、ここまで詳細に「流通」が明らかにされた「商品」が、実際にどう消費されたかは気になるところであった。屎尿双方の交換によって成り立っていたとされる（9頁）青物について論じた第一章や、そのもとになった著者の論文「食品流通構造と小売商・消費者の存在」（荒武賢一朗編『近世史研究と現代社会』清文堂出版、2011年）では消費者が強く意識されていただけに、こうした点に言及があればと思われた。

二つめに、大坂の屎尿の流通圏である。『撰津役人村文書』には、安永5年（1776）撰津役人村が所有する往來の小便について、「江戸町人」が引請けを願ひ出ていることを記している。無論、江戸の商人が介入したからといって、ただちに関東に回漕していたとはいえないが、少なくとも大坂の小便取引に江戸の資本が目をつけていることは看過できない。また、京都の事例だが『月堂見聞集』巻15には「京都町々糞之事、田舎遠国へ買取候故、山城近代之糞不自由之由」（享保8年）とある。ここで京都では山城近在百姓以外の買い取りを禁じ、「糞問屋」も半数以下に減らされている。こうしたことから、あるいは屎尿という「商品」が、大坂地域をはるかに越えて需要があったことを示しているかもしれない。著者は「鮮度と負荷」という制約から、青物と屎尿は「地域内完結型」の流通構造をもつとし（21頁）、「近距離流通構造」（10頁）に注目するが、「短時間で都市から放出」することさえできれば、そこから先は必ずしも地域を限定する必要はないのではないか。今後「肥料の歴史」（285頁）を論じされていく上では、「商品」としての屎尿の行方が地域限定か否かは重要なポイントになってこないだろうか。

また、前述の問題とも重なるが、こうした江戸町人の介入があった安永5年（1776）に先立ち、宝暦9年（1759）から明和にかけて役人村のもつ小便担桶の権利に対して介入や妨害が繰り返されている（『撰津役人村文書』）。これを小林茂は「身分的蔑視観念から非合法的に侵害せんとした」というが（『日本屎尿問題源流考』72頁）、小便仲間がまさにその渦中の明和6年（1769）に結成されている。なぜ、この時期に小便への関心が18世紀半ばに急速に高まっていくのか。一般的な「肥料としての重要性」（129頁）だけではなく、歴史的な背景についても言及がほしいところであった。

次に、なぜ家主は「下屎を高値で売却したい」(174 頁)と考えたのかである。確かに人数が多ければそれなりの額になろうし、売れるものなら少しでも高く売りたいのは人情だが、それだけで一人あたり銀二〜三匁の下屎代の攻防があればほど熾烈になるだろうか。

天保 3 年 (1832) に摂河下屎仲間が地方役所に提出した願書に「町家ニも下屎代銀ハ建家売買之節、勘定ニ相加へ被申候ハ、至而直段引下ケハ相成不申」とある(『吹田市史』第六巻、435 頁)。下屎の売却代も不動産の売買価格に上乘せられているのだ。とすれば、収益物件である借家であれば一人当たりのわずかの差であっても評価額は大きく異なることになるだろう。つまり、下屎の売買価格の高下は不動産の資産価値を大きく左右するものだった。当座の下屎がいくらで売れるかということに加えて、隠れた理由があったとは考えられないだろう。

最後に、民俗学の成果をどうとらえるかである。聞き書きという手法による民俗学の成果と文献史学の立場に徹して近世大坂を分析対象とした本書の論点が交差する点は多くはないであろう。だが、史料を解釈するうえで参考になりそうな興味深い報告が民俗学でもなされている。例えば小田原の民俗について報告した西海賢二によれば、天保 9 年 (1838) の「下肥之通」に二週間に一度程度の汲み取りが小田原宿で行われ、「大小便を分けて記載している」といい(西海賢二『城下町の民俗的世界』岩田書院、2014 年、692 頁)、大小便を別々にくみ取るのは大坂だけに限らないことが知られる。

また、小田原藩領域では昭和 32、3 年頃まで、下肥の代金として餅が使われ、「クソ餅」と呼ばれていたことが報告されている(前掲西海書、682 頁)。会津若松でも大正期には屎一人分につき正月用糯米三升程度が支払われていたという(岩井宏實『地域社会の民俗学的研究』法政大学出版会、1987 年、111 頁)。こうした糯米の使用は必ずしも新しい時代だけのものでもなかったようで、伊予の今治藩の『国府叢書』第六には次のような史料がある。

一延宝の頃迄ハ今治市街糞尿等者、農民の望ニ任し、相對に遣り來りし処、培養必要肥料其功多しとて、當時の町奉行一宮伝左衛門武良の意により、米と交易せしむる事となせり、依テ年末農家より其代として、多く糯米を出す、依テ市民貧富の別なく、此の米を以テ正月餅となせり、農夫そしり呼て、市街の糞食とぞ言へり(『今治郷土史第四巻 資料編近世二』)

下屎の代金として、明治初年の大坂で糯米の支払いが定められていたことについて、著者は「政情不安のなかで貨幣制度の流動性、信用貨幣の不在」という理由を挙げている(234 頁)が、だとすれば実態として米が使われていなかった点は不思議である(254 頁)。あるいは、本来は下屎の代金として糯米が相応しいものであるという認識が広くあったのではないだろうか。

そして、屎尿汲取圏についてであるが、岩井宏實はこれを「近郊農村」ととらえて、流通圏・通婚圏・雇用範囲・文化交流圏との重なりも指摘している(岩井前掲書)。著者は、屎尿流通に限定した堅実な議論をされているが、こうした屎尿に限らないつながりが大坂でも見ることができのだろうか。

荒武氏の著書に触発されてのつたない疑問であったが、広く多様な分野に波紋を広げるであろう書物であるが故に、読者それぞれの問題関心でいくつもの研究課題を引き出すことが可能であ

ろう。これこそ、まさに「キワモノ」といったレッテルが貼られがちな状況を払拭し、歴史学の重要な研究課題として俎上にのせる（5頁）という著者の意図が見事に達成されている証左といえよう。

終章では、「社会環境史」「肥料史研究」など興味深い可能性へのさらなる展開も示唆されている。そして、本書の「あとがき」は、「本書で述べた研究は、あくまで序章に過ぎない」という力強い言葉で結ばれている。さらなる刺激に満ちた研究が陸続と発表されることを楽しみにしたい。

【付記】 本稿は、2015年11月28日に大阪市内で開催された近世史フォーラム2015年11月例会での報告内容をもとに成稿したものである。著者の荒武賢一朗氏をはじめとして貴重なご教示をいただいた参加者にお礼申し上げる。